

## 第二百三十九話 航空消耗戦に負けた日本

大東亜戦争、就中日米戦は語弊を恐れずに言えば、航空機の戦いであり、航空消耗戦に日本は惨敗を喫したと云えなくもない。日本は、進攻する米軍を西太平洋において邀撃漸減する構想で、敵は長駆太平洋を進攻し我は待ち受ける即ち地の利は日本にあり、艦上攻撃機の搭載空母や戦艦の数、西・南太平洋の島嶼群を不沈空母化して基地航空部隊を配備して活用し得ることの利点、日米の航空機生産能力も精々1:3程度であり、勝算は十分にあったのではないか？それが何故、惨めな敗北となったのかを考察することは益あることだろう。

### 1 日米の航空機生産能力に比較について

#### (1) 日米の航空機生産力

1944年度の日米の航空機生産数は、26,500機:90,000機、1:3である。これは開戦前からの伸び率比較でも概ねパリティである。然し、米軍機の稼働率は、80%以上であるが、日本は当初は80%程度であったが、漸次低下し50%以下ある場合には20%とも云われる。一機を生産工数も日米においては相当の格差がある。(零戦=10,000人H、米P51=2700人Hとのデータがある。)

米国がこれらを可能にしたのは、フォード主義(規格化、専用機械、作業の標準化、流れ作業化)と云われる大量生産ノウハウの賜物である。日米共に未熟練工(学徒動員、女学生も)に依存せざるを得なかったのは同様であるにも関わらずに結果的に日米の懸隔がさらに拡大することとなった。

#### (2) 世界に冠たる新鋭機の量産化が出来ず、次期機種の開発の遅れも指摘 etc

艦爆「彗星」、陸軍の「飛燕」：高性能エンジン不備→低性能の日本のエンジン

「誉21型」エンジン：高性能すぎ、量産品は性能低下顕著

艦上偵察機「彩雲」も性能低下顕著

日本の品質管理技術では期待通りの性能を実現できなかった。

零戦の後継機「烈風」の開発遅れ

### 2 想定外の運用・戦場により戦力消耗

陸軍は、対ソ戦を想定し、大陸戦場で航空優勢の維持を追求していたが、戦局が逼迫して、航続距離に難があり訓練も不十分な想定外の島嶼戦に投入され戦力を消耗してしまった。

海軍は、艦隊決戦の補助戦力としての運用を第一義としていたが、敵航空機との戦いを強いられ、逐次戦力投入で消耗してしまった。局面局面における航空優勢は確保できなかった。先覚者が航空主兵論を唱え、航空の重要性は理解されていたのだろうが、転換に至らなかったということだろう。

とある本によれば、巷では航空重視論が盛んに喧伝されていたとされるが、軍を動かすには至らなかった。

### 3 搭乗員や整備員の育成等



海軍は、ガ島作戦以降の各作戦において搭乗員を多数失っている。搭乗員の急速育成プログラム(予科練(甲・乙・丙)、少年飛行兵制度、海軍予備学生等)を発動するも、技量未熟、部隊訓練不十分で損耗状況は幾何級数的である。日米戦における海軍航空機搭乗員の月別損耗数推移をみると悲しくもなる。

### 3 時既に遅きに失した第一機動艦隊

1944/3/1、第一機動艦隊が編合(戦艦主体の第二艦隊と空母中心の第三艦隊)され、航空主兵思想に切り替わったという見方もある。一方、米軍は、真珠湾奇襲を回避し得た空母をもって航空主兵論の具体化へ動いたのだが、日本は遅きに失した。

(了)

